

【会員だより】

技師 39 年つづけて思う

京都府立医科大学附属病院 塩山 武男(57 回生)

「技師はドアマンたれ」この一文をふと目にしたのは、仕事場にあった何かの雑誌からでしょうか。強く心に惹かれるものがあり、それから患者さんの出入りにはドアマンを実践するようになりました。

患者さんには慈愛をもって接すれば、患者さんからも有難がられて検査を終えることができます。その時の診療放射線技師としての充実感がたまらなくて 39 年も続けられたのではないかと思っています。そもそも、私が診療放射線技師になるきっかけは、玉田会長のせいなのです。会長は私の一年先輩で、小中高とずっと一緒にサッカーをやってきて、サッカーが上手くスター選手のような会長に憧れて背中を追うように技師の道を選んだのです。私の大好きな芸人が「俺は日本一感じのいい芸人や」と言ったのを受け、私も「日本一感じのいい技師」になってやろうと、個人的にスローガンを持ってやってきました。そうすることで、なぜか楽しく仕事が続けられたことも一理あります。今はほとんどがデジタルによる画像出力です。私の技師初期は、フィルムのアナログ出力であり、撮影条件を少しでも間違えようものなら再撮影の洗礼を受けます。毎日ワキ汗をかいて仕事してきたことが思い出されます。若い後輩には「お前達はいいいよな、昔はな・・・」とついつい古株の悪い妬みみたいのを口にしそうになります。今のような検査装置の進歩を目にすることができたのも長年の従事のお陰かな、とも思っています。また、放射線技師を主人公にしたテレビドラマが放映されたことも驚きました。



主人公は知識と技能を兼ね備えた理想的な技師で、やっと技師の仕事が広く世間に認めてもらえるようになったんだと誇りに思えるようになりました。

私の勤務する病院には毎年、母校の実習生がやってきます。やはり母校の学生となれば可愛いもので、つい同門意識が働いておしゃべりをしてしまいます。私はいつも学生には「質問はしてくるな」と、実習の教授などせずくだらない世間話に終始します。大学の先生方に知れたらお叱りを受けそうですが、そうさせたのも、質問されてちゃんと答えられない自分があったからなのでしょう。

私も今はフェードアウトしていくような勤務内容で寂しい思いをしていますが、これまで 39 年間技師をやってきたことは間違いでなかった、幸せであったとつくづく思っております。

実習生に何も教えない私が時々言うことがあります。「技師はドアマンたれ」と。

以上

* 通巻 244 号 2022 年 7 月 10 日発行(2021-No.2 より)